

2. 荒穂神社の御神幸祭にみる歴史的風致

(1) はじめに

かつては基山町のシンボルである基山の山頂に鎮座していたと伝えられる荒穂神社は、現在の地に社殿の位置を変えて氏子達の尊崇と親しみの中、様々な伝説とともに、代々受け継がれてきた祭礼やそこで奉納される民俗芸能が今も残り、祭当日に町内外の多くの人々の前で披露される。この祭礼の時期を迎える初秋の頃、夜の町内を歩くとどこからともなく、太鼓と鉦の音が「ドン、カン、カン」と聞こえてくる。町民は、その音から祭りの通称として「ドン、キャン・キャン」とも親しみを込めて呼び、荒穂神社の御神幸祭が近づいていることを感じる。

(2) 荒穂神社の御神幸祭にみる歴史的風致

荒穂神社の御神幸祭にみる歴史的風致は、下表のように示される。

	建造物と町並み	営み
荒穂神社の御神幸祭にみる歴史的風致	<ul style="list-style-type: none"> ●御神幸祭に関わる建造物と町並み <ul style="list-style-type: none"> ・御神幸祭に関わる建造物（荒穂神社 等） ・御神幸祭に関わる町並み 	<ul style="list-style-type: none"> ●御神幸祭 <ul style="list-style-type: none"> ・御神幸祭の歴史 ・御神幸祭の運営の仕組み ・御神幸祭の行程と活動

① 御神幸祭に関わる建造物と町並み

ア) 御神幸祭に関わる建造物

御神幸祭が催行される荒穂神社は、特別史跡基肆城跡が鎮座する基山の南麓の宮浦に、基山を背にして建つ。江戸時代安政年間に再建された社殿は、素朴ながら装飾豊かなもので、氏子をはじめ町民の自慢の建造物である。平安時代の貞観2年(860)に編さんされた歴史書である『日本三代実録』には、従五位上荒穂天神に正五位上の位を授けたと記されている。また平安時代中期に神社一覧として記された『延喜式神名帳』には、小社として、肥前国に四社ある式内社の一つに数えられるなど、古くより記録に残る神社である。主祭神は、荒穂天神とされかつては基山山頂に社があり、現在も特別史跡基肆城跡の中にある山頂のタマタマ石と呼称される花崗岩の巨石を磐座とする神であったと伝えられる。このことを傍証するかのよう、荒穂神社の南の鳥居と神殿を結んだ延長線上に現在もタマタマ石が鎮座している。

神社に残る文書の一つに、江戸時代、貞享2年(1685)に記された『荒穂神社縁起』がある。それには御祭神に「中 荒穂大明神 瓊瓊杵尊」ほか本社六宮が見え、さらに別宮として北御門神(基肆城跡)、伊勢太神宮(小倉)ほか二社が記されている。ここに記される北御門神は、基肆城跡の北帝に、伊勢太神宮は本町の東端に位置する伊勢山神社である。

【 荒穂神社】

『荒穂神社縁起』によれば、社殿は特別史跡基肆城跡がある基山山頂にあったが、戦国時代の戦火によって炎上し、神職、社僧も四散した。その後、戦国末期に基山南麓の地に再興され、慶長4年(1599)に対馬藩宗家の所領となってからは幾たびか寄進を受けつつ現在に至っている。

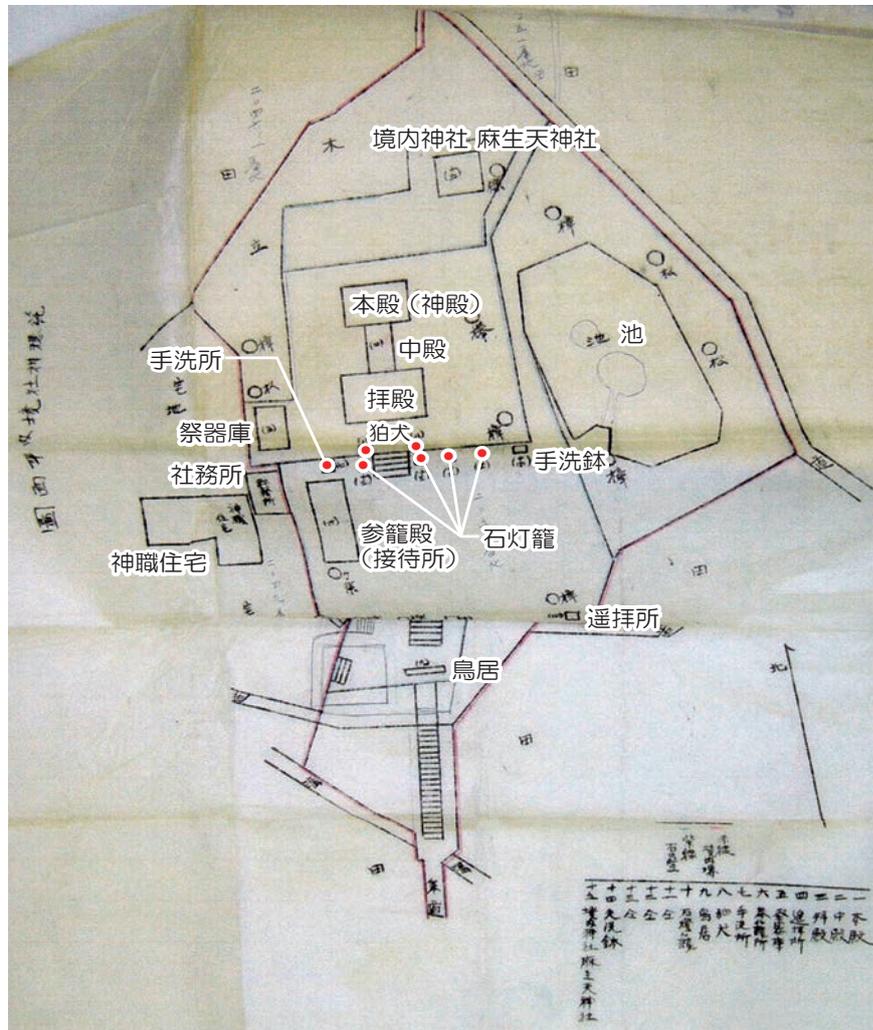
荒穂神社の建物配置は、北から神殿、拝殿、拝殿の西側に神輿を収納する祭器庫、玉垣を経て階段下の西側に参籠殿(接待所)がある。この参籠殿(接待所)前が、御神幸祭の際の演舞場となる。境内西辺の最も南側には、切妻平入一階建ての社務所が建っている。

境内東辺には、基山からの水を引く水神が祀られ、堀状の池の中に中島を設け鳥居・祠が建てられている。清浄な水に満たされた水神池は、以前は禊の場という神聖な池になっていた時期もあった。そ

の為に、悪戯にこの池に入ると災いが及ぶと言い伝えられてもおり、子どもの頃ふざけて池に入り発熱した記憶を持つ人もいる。

荒穂神社社殿を中心として、北に山、東に流水、西から道を配し、南に潮（塩）井川が位置している。

このように古くから本町の人々に祀り続けられてきた荒穂神社の秋の大祭が、町民が通称として「どん、きゃん、きゃん」と呼ぶ、御神幸祭である。



資料 境内図「縣社昇格出願書類」昭和3年

○神殿、拝殿

神殿は、昭和3年(1928)の『縣社昇格出願書類』には境内地最奥部北端に、背後に基肄城ありし基山きざんを拝するように、安政5年(1858)建立とされる神殿、安政2年(1855)建築とされる拝殿を配する。



写真 神殿、拝殿

○祭器庫

神殿西側には、石製の布基礎の上に切妻棧瓦葺き平入の土蔵造りの祭器庫があり、現在は、土壁を保護するために外壁を縦板貼りで覆っている。昭和3年(1928)に記された『縣社昇格出願書類』に記された位置と変わりはなく、建物構造などからも、この頃には建築されていたと考えられる。



写真 祭器庫

○参籠殿（接待所）

神殿から一段低い位置に、明治17年(1884)建築で、大正4年(1915)、昭和21年(1946)修理の参籠殿(所)が配されている。「参籠殿(所)」は、建築時である明治17年(1884)の棟木墨書では「奉再建接待■(■:判読困難な文字)」とされ、接待(所)、参籠殿(所)、神楽殿などその時々で移り変わっている。



写真 参籠殿（接待所）

【みこしあつめ】

みこしあつめは石造りの神輿台で、荒穂神社側からお下りする際に、結界である塩井橋（本来、「潮井橋」と称される橋であるが、現名称を用いる。）を渡る手前の場所にある。台に刻んである大正14年(1925)に氏子より寄進されたもので、低い塀に囲まれた約6畳ほどの空間に1mほどの高さつくられた石積みの神輿台である。『旧蹟全図南』にも「みこしお休み所」と記されており、御神幸祭の神輿上りの際に、結界に建てられる大しめ縄をくぐり、荒穂神社の神域へ入ったことを示し、この神輿台に荒穂の神をのせた神輿が置かれ、神職による払いの神事が執り行われる。



写真 みこしあつめ

【旗立て石】

花崗岩製の旗立て石は、御神幸祭の際、幟^{のぼり}が立つ場であり、お旅所^{たびしょ}であるお仮殿がある平野部へ広がりを見せる仁蓮寺集落の氏子の人々によって明治32年(1899)に寄進されたものである。旗立て石には、東に「神龍躍在天地」西に「威鳳翔在高岡」と、黒々とした墨で書かれた二様の幟旗^{のぼりぼた}が立てられる。稲穂実る田んぼの中に立つ幟旗と、その間を荒穂の神を乗せた神輿行列が早朝のすがすがしい光を浴びながら、そして午後のお上り時には西日に照らされながら賑やかに通っていく。



写真 旗立て石



写真 旗立て石

【西長野天満神社】

『元禄絵図』にも記載されている長崎街道から西に分岐して延びる旧道の北脇に位置している。神社の入り口には、「昭和三十一年四月吉日」と刻まれた氏子により奉納された鳥居が聳えており、さらに北奥に入母屋瓦葺の社殿が築かれている。この社殿は、本来長崎街道沿いにあった「がらんさん」と呼ばれている巨石をこの地に移設し、本町観光協会発行の『神社散策ガイドブック』によると、これを祀るために昭和13年(1938)に建立されたものである。「がらんさんは」現在も神殿奥に安置されている。さらに、昭和19年(1944)には、西長野地区の鎮守として、町内の神社より菅原道真公を祭神として勧請したことで天満神社となった。祭礼は、7月と9月にガンジョウジ、10月に秋祭りである「おくんち」が行われている。御神幸祭の前になると氏子たちがここに集まり、奉納される鉦風流の稽古が行われ、周辺地区にも太鼓や鉦の音を響かせている。



写真 西長野天満神社

イ) 御神幸祭に関わる町並み

御神幸祭は農耕祭事に関わる色彩の強い祭であるだけに、荒穂神社に由来する「宮の前」「宮の後」「宮ノ脇」の字名が残る宮浦集落を抜け、稲穂垂れる水田地帯を通る道を荒穂の神は御神幸される。神輿に乗られた荒穂の神は『元禄絵図』に残る道を通り、かつて鳥居が建っていた塩井橋のたもとの「みこしあつめ」や、明治35年に仁連寺地区の人々が寄進した旗立て石に立てられた幟の中を、鎮齋隈(鎮西隈)^{ちんじやんくま ちんざいのくま}にあるお仮殿までお下りし、午後、再び荒穂神社を目指してお上りされる。



写真 宮浦集落(宮の前地区)



写真 宮浦集落(宮の後地区ほか)



写真 御神幸の道(春)

【御神幸の道】

荒穂神社から鎮齋隈(鎮西隈)のお仮殿までの約2kmの道のりを荒穂の神様は御神幸される。御神幸の道は、『元禄絵図』にも描かれており、昭和13年の地形図でも追うことができる道である。その後、道路整備によって一部改変されてはいるものの、おおむね江戸時代からの道を現在も踏襲し、御神幸の道として催行されている。

荒穂神社から下ること300m程のところ、お上りの際、神輿を置く石積みの台座みこしあつめがある。ここには潮(塩)井川が流れ、川にかかる橋の荒穂神社側の岸にしめ縄がかけられるが、その大しめ縄をかける大竹を支える柱を据える穴が道路に穿たれている。みこしあつめの台座よりやや荒穂神社寄りに、かつて大鳥居があったことが昭和29年(1954)頃撮影された写真に見ることができる。

もう一つのしめ縄は、お仮殿が所在する鎮齋隈(鎮西隈)丘陵にのぼりつめた場所にかける。

ここにも、大柱としての大竹を支える柱を据える穴が2ヶ所穿たれているのは上記のところと同じであるが、さらに支え縄をくりつけるための支え柱を据える穴が4ヶ所穿たれており、長年続けられてきた祭の工夫と配慮が見える。

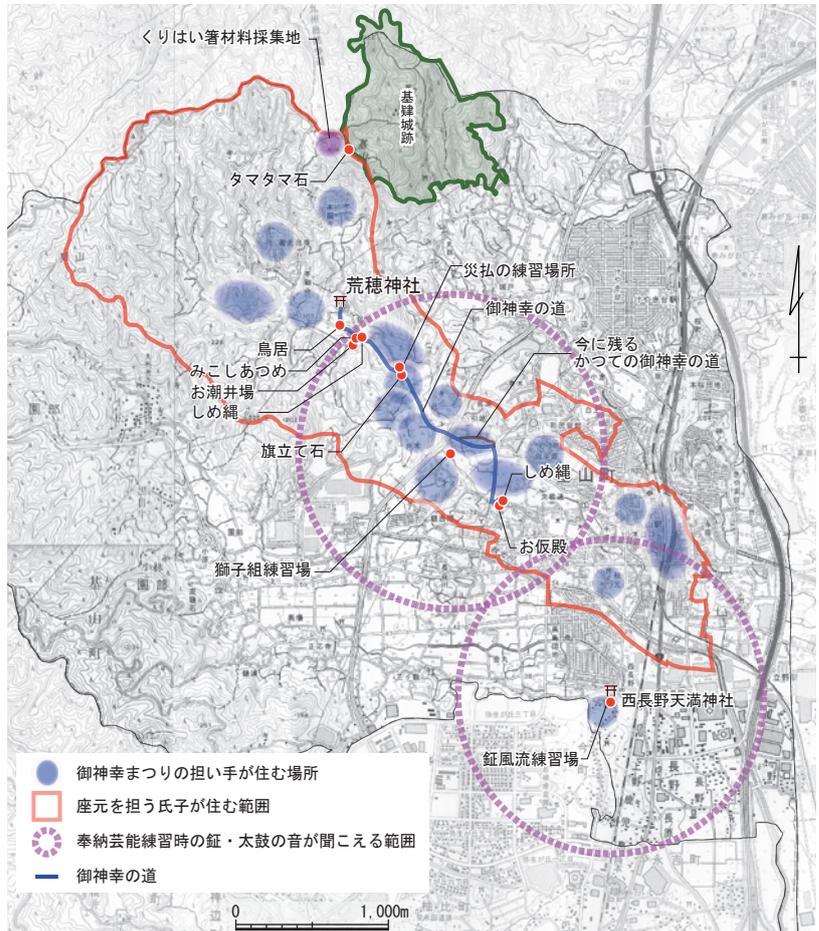


図 荒穂神社の御神幸祭に関わる建造物と町並み

②御神幸祭

ア) 御神幸祭の歴史

御神幸祭は、『荒穂神社縁起』（貞享元年（1684）（以後、随時追記されている））の行事一覧に「9月19日式自前後七日大祭有」とあるように14日から20日までの7日間を宮座主宰で大祭を行い、その内の17日から19日にかけて三日三夜の神幸（神様が神輿などに乗り、お旅所や神殿などへ行かれること）があったとされる。現在は、秋分の日に御神幸祭が行われている。

御神幸祭の起源は明確ではないが、奉納される芸能の中では鉦風流や獅子舞が古代・中世頃に始まったとされる伝説が本町で伝えられている。また、永正2年（1505）の御神幸行列・儀式について記された断簡には「田楽、舞楽奏、獅子」とあり、この田楽の獅子に鉦風流が使われたのではないかとの考察がある。さらに、貞享2年（1685）の『荒穂神社縁起』に「獅子、田楽（猿楽）の舞、風流のはやし、おんかくの声すゝしく」とあることから、この祭は少なくとも16世紀初頭以前より行われていたことがわかる。そして、その後に羽熊・挟み箱等の大名行列が江戸期後半までに加わり、現在奉納されている芸能が揃っていったと考えられている。

イ) 御神幸祭の運営の仕組みと祭の概要

御神幸祭全般を取り仕切る組織として、神課と呼ばれる株組織がある。神課とは、荒穂神社と深いつながりを持つ12名で構成される神社祭祀を担う組織であった。原則として世襲であり神課は元来地名で呼ばれ、神事の後行われる直会の際の席次は、地名によって定められていた。現在は、神課の人々に代わり関係行政区の区長や世話人が宮総代となり、区民が氏子として祭を担っている。

御神幸祭は、毎年9月初旬の氏子役員（現在は、関係行政区の区長や世話人によって構成される）による小屋入りに始まり、御神幸祭の1週間前の日曜日に、祭に関わる集落の人々がしめ縄つくりのために集まる頃から、町内に祭の舞台が整えられていく。秋分の日の大祭の前日に行われる柴垣の座から大祭へと寝る間がないほど神事が続き、祭り一色となって、大祭当日の早朝を迎える。

大祭早朝、荒穂神社神殿を奉納芸能の人々を先頭に、お神輿に乗った荒穂の神が、鎮斎隈（鎮西隈）にあるお仮殿まで御神幸する。そして、その日の午後、早朝と同じように行列を組み、お神輿に乗った荒穂の神様がお上りによって荒穂神社神殿へお帰りになる祭りである。

また、荒穂神社の秋の大祭である御神幸祭は、瓊瓊杵尊の昔話として町民の中に伝えられてきた。その中に登場する瓊瓊杵尊の農作業を手伝った馬が立ち寄ったと伝えられる地域の人々によって、奉納芸能が担われ行われている。『縣社昇格出願書類』に記された御神幸祭に関わる人々は、かつては鳥栖市基里までの広域に広がっていたが、現在は荒穂神社がある宮浦から本町の南西の西長野の集落の人々で構成される。

この催行者の広がりを知ることができる瓊瓊杵尊の昔話を、平成27年（2015）に『荒穂の神さまと御神幸祭』として漫画仕立ての一般解説書を作成し、町民に広く知っていただく取組を行うとともに、町民の求めに応じて町内の歴史系民間団体である基山の歴史と文化を語り継ぐ会により朗読会が開催されている。

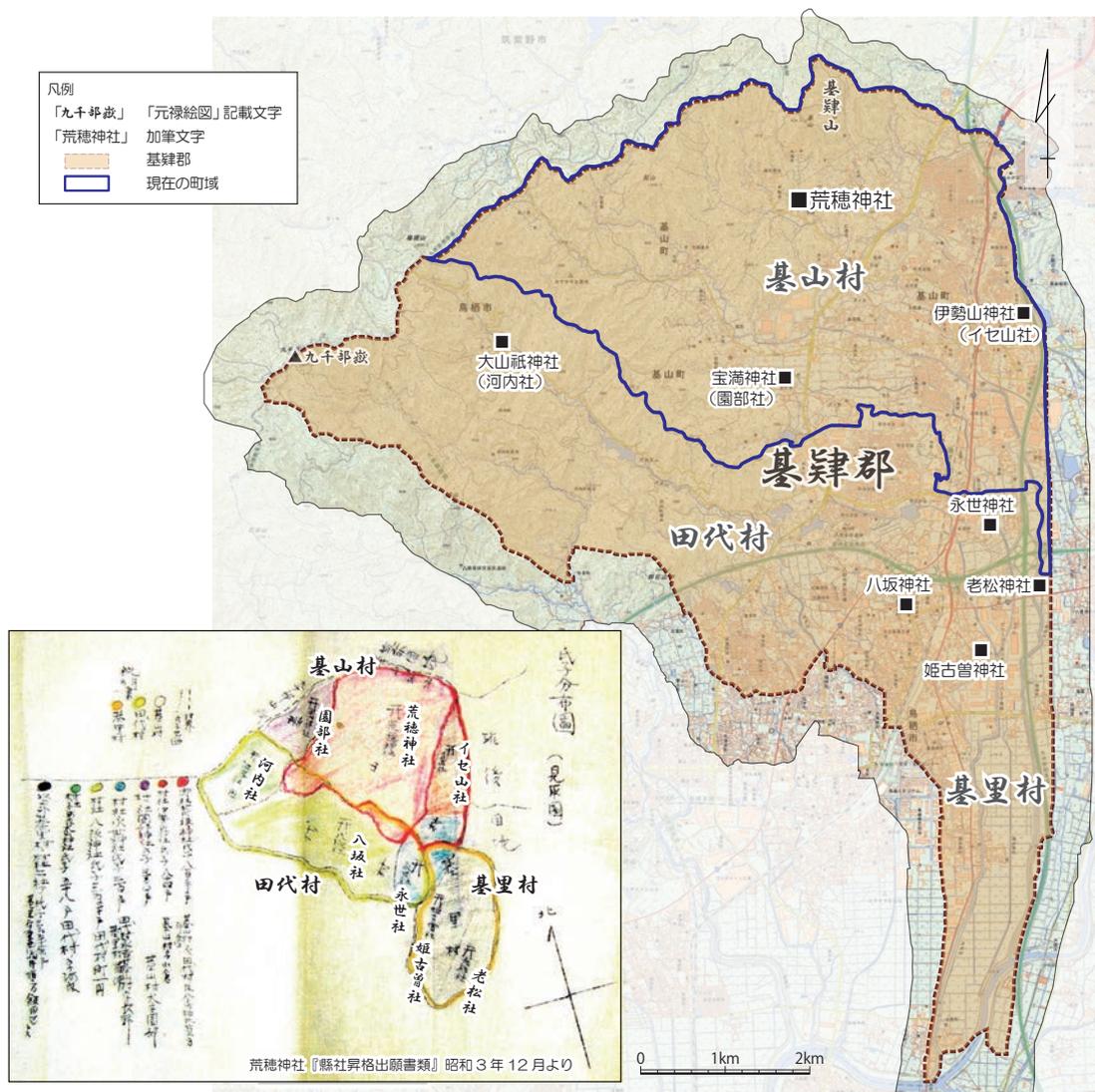


図 『縣社昇格出願書類』に記載される氏子の範囲（『元禄絵図』より）

ウ) 御神幸祭の行程と活動

【各地ではじまる奉納芸能の練習】

祭で奉納される芸能は、獅子組、鉦風流、大名行列、そしてお囃子組など、それぞれに分かれ、大祭が開催される月の9月初旬から練習が開始される。多くの人々が日中は、仕事をしていることから、夕刻から夜にかけて行われる。鉦風流の久保田集落では、毎年9月18日から21日の4日間、集落内の氏神さまの境内で練習を行い、六つの集落で演じる獅子の練習は、宮浦のJAさが基山地区共同乾燥所で9月15日から毎晩8時～10時まで行われる。こうやって、夜の澄んだ初秋の空気の中に鉦風流の「どん、かん、かん」の音や笛の音が町内をこだまし、御神幸祭の近づきを町民に知らせていく。



写真 鉦風流の練習（久保田集落にある西長野天満神社）



写真 獅子組の練習(向平原、辻、引地、一井木、水上、田中)

【しめ縄打ち】

しめ縄の素となる稲藁は、町内の田んぼで一年前に刈り採られたもので、お仮殿前の広場を利用し、刈り採られた年の秋晴れが続く10月の5日間、天日干しされる。その後、お仮殿の中で一年後のしめ縄打ちの日まで保管される。



写真 稲藁干し



写真 藁選り

大祭の二週間前には、しめ縄打ちの準備として稲藁の葉や付着物を取り除く「藁選り^{すぐ}」の作業が行われる。そして、大祭の一週間前の日曜日、午前8時からしめ縄打ちが始まる。それに先立ち、お神酒が振舞われ身を清めた後、男衆によってしめ縄打ちが行われる。力強い掛け声とともに神域の結界を示す大きいしめ縄2条、支え縄4条、そして大祭の一週間前から神様が御幸される場となる座元の家に張る縄の順で打たれていく。大人数でしめ縄の素である「さしわら」が大量につくられ、それらを「えい、さ。えい、さ」の掛け声とともに差し込みながらしめ縄の形に整えられていく。途中、10時の休み、正午の昼食時には、女衆によるお接待が用意される。秋とはいえ暑さが残る年もあり、お接待でいただく食べ物、飲み物で息をふき返すほどの力を戴ける。いわば、集落の男衆、女衆力を合わせてしめ縄打ちが行われていく。



写真 しめ縄打ちの様子



写真 さしわら

【しめ縄張り】

午前中にしめ縄打ちが終わると、午後、結界を示す2ヶ所にしめ縄張りが男衆で行われる。晴天時はジリジリとした陽が射し、荒天時は大粒の雨が降り注ぎ雷も鳴り響く。どんな状況であれ、しめ縄打ちが行われた午後一気にしめ縄張りへと移る。まずは、荒穂神社(神域)と世俗界を画する潮(塩)井川にかかる橋の横にしめ縄を張る。前もって準備されている大竹に番線とともにしめ縄と支え縄を取り付け、掛け声とともに支え縄を引き大竹を立ち上げる。微妙な力のズレが大竹の立ち姿を変えるため、「右〜っ」「左〜っ」の差配する声々が山あいこだまする。潮(塩)井川のしめ縄張りが終わると、次にお旅所

であるお仮殿の入り口のしめ縄張りへと移動する。お仮殿は、荒穂神社がある谷筋が平野へと開放する本町の水田地帯が一望できる鎮斎隈(鎮西隈)の地にある。谷筋から登った鎮斎隈(鎮西隈)の丘陵上に結界を示すしめ縄が張られる。

大竹にしめ縄、支え縄が取り付けられ、掛け声とともに立ち上げられる。雷雨の時の立ち上げは、言葉に表現できないほどの恐怖と荒穂の神への信頼との闘いを皆心の中に秘めつつ、しめ縄張りを行う。



写真 しめ縄張り(左・中:潮(塩)井川 右:お仮殿)

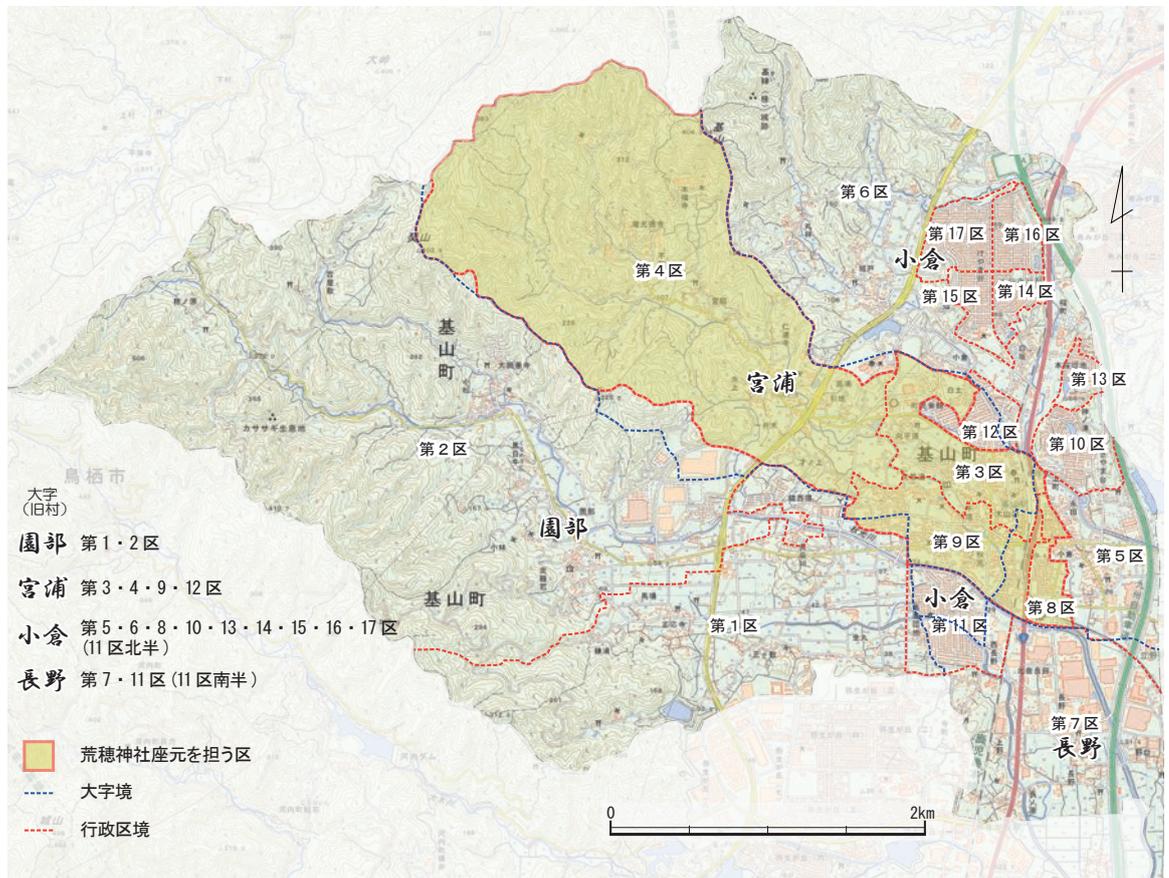


図 座元を担う氏子役員が住まう区

【神の座】

多くの氏子たちが集い早朝より始まった、しめ縄打ちとしめ縄張りが終わると、氏子役員だけによる神の座がその年の座元の家で行われる。かつては神課の中で当番制で渡される座元宅で行っていたが、現在は氏子役員で輪番しており、3区、4区、8区、9区の4行政区の区長宅が輪番制によって座元を努める。座元宅には、しめ縄打ちの後、しめ縄が掛けられ神の座が執り行われる神域となる。

神の座とは、しめ縄打ちが行われる大祭一週間前から大祭の前日まで、荒穂の神が座元宅へ御神幸する神事である。座元宅に御神幸することで、荒穂神社とお仮殿という限られた空間を御神幸するだけでなく、広く氏子たちと出会い拝礼を受けるもので、その期間が設けられる。荒穂の神が御神幸し

た座元宅は、大祭前日の柴垣の座まで、門戸を開き参拝者を迎えるという役目を担う。しめ縄が掛けられた座元宅は、神域としての厳かさと御神幸祭の風情を広げる役割も担っている。



写真 座元宅にかけられたしめ縄

神の座は、荒穂の神をお連れするために、氏子総代と神職二人で荒穂神社^{しんしよく} 神殿へ入り、神職の祝詞奏上^{のりと}の後、神殿内より荒穂の神が持ち出されることから始まる。氏子総代の手大切に抱かれ荒穂の神は座元まで運ばれていく。座元宅には、氏子たちによって編まれたしめ縄が玄関前に掛けられ、神域として神聖な空間が創られている。そのしめ縄をくぐり、氏子総代に抱かれた荒穂の神は座元宅に設けられた祭壇へと掛けられる。掛け軸に描かれた荒穂の神は、中央に荒穂の神、左に馬に乗る神、右に鹿に乗る神が描かれ、座元宅の床の間に厳かに掛けられ、神の座の神事催行を待つ。女人禁制の神事であり、氏子役員が座する空間が神域とされ、座元宅で諸事お世話をする女性たちは神域に入ること禁じられる。



写真 荒穂の神さま掛け軸



写真 神の座の神事

神職による神の座の祝詞が奏上され、御託宣^{ごたくせん}の儀が始まり、荒穂の神が座元へ降臨^{こうりん}したことを告げる。その後、氏子役員、座元男子による柴奉納が行われ、神事は直会へと移行していく。

直会では調味料を使わず素材のみを味わう供物が、まずは荒穂の神へ、そして神域に座した氏子役員の前に配される。供物の食材は、水煮の豆、ニンジン、大根等とともに餅が皿に盛られ、さらに食するための箸^{はし}は、荒穂の神が座していた基山山頂北帝付近に育つ栗の木を材料とした「くりはい箸」が準備される。膳を配する役回りは、座元の男子が執り行う。神域と世俗の境界まで女性たちによって運ばれた膳を、座元の男子が受け取り、荒穂の神、氏子総代、氏子役員の前に配していく。氏子役員の掛け声によりお神酒が配され、直会が始まる。急須^{きゅうず}に入れられたお神酒を、飲み干すまで直会は続き、その間、膳に配された供物を氏子役員は食していく。座元男子が氏子役員への接待を執り行うが、神域に入れない女性たちは、世俗界と神域の境界で男子たちに小声で指示を告げる。気が利かない座元男子に少し苛立ちを隠せないその声が、氏子役員たちの笑いを誘う。これも神の座の直会の独特の雰囲気をつくり出している。



写真 配膳を行う男子



写真 供物(赤杵:箸は、くりはい箸)



写真 お接待の様子



お神酒が飲み干されると、神の座は閉じられ、荒穂神社の御神幸祭までの一週間、座元で荒穂の神はお過ごしになる。この間、座元の家は荒穂の神を拝みに訪れる氏子たちに開放される。かつて荒穂神社の氏子は、町内のみならず鳥栖市域まで及んでおり、広域に広がる氏子たちが荒穂の神を尊崇する機会として、神の座ならびに座元での荒穂の神を拝する期間が設けられていた。

神の座が閉じられると、一同は一日かけて行われたしめ縄打ち行事の直会会場へと場を移す。

しめ縄打ち行事の直会は、しめ縄打ちの無事を感謝する皆の安堵の気持ちを表現するかのよう、芸達者な人々の歌声、それを見守る人々の笑い声が宴の場を盛り上げ、荒穂の神に感謝する。本町で執り行われる宴に欠かすことができない割り箸とお猪口でつくった「即席マイク」が、この直会でも登場し、声に自信のある氏子たちが歌声を披露し直会を盛り上げていく。



写真 しめ縄うちの直会の様子



写真 即席マイク

【柴垣の座】

御神幸祭の前夜、座元で一週間お過ごしになられた荒穂の神が、神殿へお帰りになる行事である。

拝殿西側を舞台に執り行われる神事で、その日の午後、拝殿西側奥に柴による垣根が設けられることから、柴垣の座と呼ばれている。午後8時、あたりが暗くなり秋の虫の声がこだまする頃、氏子役員が柴垣の座の諸道具を携え、荒穂神社へ参集する。昼間に設けられている祭壇前に祭壇が設けられると、座元床の間に座しておられた荒穂の神を描く掛け軸が掛けられる。柴垣の座の神域は、拝殿西側にある石段から上位が神域とされ、石段から下位が世俗界で、直会の諸事を準備する女性たちは、石段下のみで準備が行われる。祭壇ならびに直会の準備がなされている間に、座元による迎え火が世俗界西域、祭器庫前にて小規模ながら焚かれる。木製の割りばし状に割いた薪をやぐら状に組み、火が着けられる。この迎え火を灯すと、柴垣の座の催行が始まる。



写真 神殿西側に設けられた柴垣

＜直会について＞

本来は神事を構成する行事の一つであり、供物を神と共にいただくことで神との結びつきや加護を願うための儀式と考えられているが、一般的には神事の最後の宴会という意味でも呼称されている。

不要な灯りが消され、ロウソクの灯火^{ともしび}だけの薄暗がりの中、神職による祝詞が奏上され、氏子役員ならびに神の座同様に神域で諸事お世話を行う座元男子による柴奉納が執り行われる。



写真 迎え火



写真 柴垣の座 神事



その後明かりが灯され、直会へと移る。直会も神の座同様に、急須の中に入れられたお神酒が飲み干されるまで続けられる。神の座の直会で慣れた座元男子の所作には安心感が生まれ、世俗界でお世話する女性たちにも心なしか安堵の空気が漂う。



写真 直会の準備



写真 配膳



写真 お接待の様子

お神酒が飲み干されると、柴垣の座は閉じられ、荒穂の神は神殿内へと遷座される。神殿内に遷座された荒穂の神は、一年の内で最も盛大な大祭、御神幸祭を待つ。その後、明日からの催行者たちが参宮し、神職によるお祓いが行われ、併せて道具類のお祓いも行われ、いよいよ大祭本番を待つばかりとなる。



写真 前夜祭時のお祓い



【大祭】

前夜執り行われた柴垣の座の余韻冷めやらぬ、午前4時、氏子役員は羽織袴で参宮し、御神幸祭へむけての神事催行へ立ち会う。

神職による祝詞奏上が行われ、いよいよ大祭の開幕である。

○お下り

すがすがしさが感じられるようになる秋分の日の早朝、午前4時に宮総代の人々が集まり、神殿発御祭の神事が荒穂神社神殿で行われ、お祓いが行われた獅子頭が神殿から持ち出されると、これから荒穂の神様が御神幸される道々をお清めする潮振りがなされていく。潮振りは、催行の道を御神幸する清浄な道とするために、潮井川から採水された潮を、道の両脇に置かれた御幣に掛け、清めるものである。御幣は大祭当日の夜が明ける前、氏子役員の手によって、御神幸催行の道であることを示すために、旧道の交差点(辻)を踏襲し、催行の道に入り込む道との交差点(辻)8ヶ所に置かれる。

午前5時から、荒穂の神の御神殿から神輿への御進入祭が執り行なわれる。この頃、鉦風流の催行者による寄せ鉦が打ち鳴らされ、その鉦の音に引き寄せられるように各催行を担う人々が集合し、「白袴」と称される人々が神殿横の祭器庫にて白装束と黒烏帽子の衣装への着替えが行われていく。毎年参加する者、初めて参加する者様々な顔が集う。「久しぶり」「元気しとった」の声々が飛び交い、一年の無事を確認できる良い機会となっている。



資料 御神幸の道『元禄絵図』



写真 潮振り



図 御幣配置場所



資料 大鳥居 昭和29年(1954)



写真 御幣

その頃、神殿の前では各芸能の奉納が行われている。奉納の順は、祭催行の災いを祓いのける災払にはじまり、鉦風流、獅子舞、台傘・立傘、白羽熊、挟箱、黒羽熊の順で行われていく。この時は、皆一様にこれまでの練習の成果を最終確認するかのごとく奉納されていく。



写真 奉納芸能を見守る人々



写真 出立前の奉納芸能(鉦風流)



写真 出立前の奉納芸能(獅子舞)

各芸能は奉納の終わりとともに、境内を後にし、お仮殿のある鎮齋隈(鎮西隈)へと出ていく。全ての奉納が終わる頃、宮総代の「長柄鎗」「鼻高面」「御紋板」「絹笠」の呼び声で、神殿横で白装束に黒烏帽子に着替えた人々が役に付く。神輿を先導する「鼻高面」は、赤面が道案内の神として知られる猿田彦大神様、緑面が天孫降臨の際、瓊瓊杵尊の供としてきた天鈿女命で、「はなたか面」の愛称で呼ばれ、面に記された紀年から文化7年(1810)の奉納面であることが分かる。



写真 鼻高面



写真 鼻高面の裏面 献納日の記載がある

先導者が役に付き全てが神殿下の明治17年(1884)建築の接待所前にある境内広場へ降りると、最後に荒穂の神様が座す神輿が神殿より掛け声とともに担ぎ出される。神殿下の奉納場には、荒穂神社を尊崇する人々が集い、神輿が降りてくるのを待ちわびる。人々の中に神輿が入ると、「支え竹」が準備され、老若男女が神輿の下を一年の無事への感謝、これからの無病息災を祈りつつぐっていく。その時催行されるのが、太鼓と笛によるお囃子である。独特のフレーズに祭りの風情を高めている。

お囃子の中、今年生まれた子を抱きぐる親子、一年の無事を感謝し車いすでぐるお婆さん、様々な思いが神輿をぐることで満たされていく。

神輿ぐりが終わると、皆手を合わせ境内から神輿が出ていく姿を見送る。「えい、さ」の掛け声とともに神輿担ぎ手によって神輿が動き出す。荒穂神社の長い石段を一步一步確かめつつ降りていく。



写真 境内に集った人々が、神輿の下をくぐる



写真 神輿支え竹

夜が明け朝日が降り注ぐ中、いよいよ荒穂の神様が、一年の豊作と人々の暮らしを確かめられる御神幸が始まる。御神幸の道々には、頭を垂れた稲穂実る田んぼが広がり、稲穂の香りとともに一年の豊作を五感で感じつつお下りしていく。この催行の道は、『元禄絵図』にも記録された道で、その後道路改良によって幾分変更されているものの、稲穂垂れる田んぼの風情の中を御神幸することに変わりはない。神輿が下る道沿いには、御神輿が通るのを待つ人々が各所に集まっている。多くの人々が集っている場所に差し掛かると、神輿が止められ、神輿くぐりがお囃子とともに催行される。この場でも人々の祈りが、思いが満たされていく。神輿の上に座す荒穂の神の笑顔が見えるかのように、神輿上部の鳳凰が朝日に輝きを増す。

この神輿くぐりを人々が集う場で幾度となく行いながら、稲穂実る田んぼの中をお仮殿が建つ鎮斎隈(鎮西隈)へと歩を進めていく。

朝日降り注ぐ中、神輿はお仮殿へ到着する。

お仮殿到着とともにお仮殿着御祭が行われ、再び芸能が奉納されてお下りが終了する。



写真 旗立て石に掲げられた幟旗の間を神輿が下る



写真 沿道で行われる神輿くぐりの様子

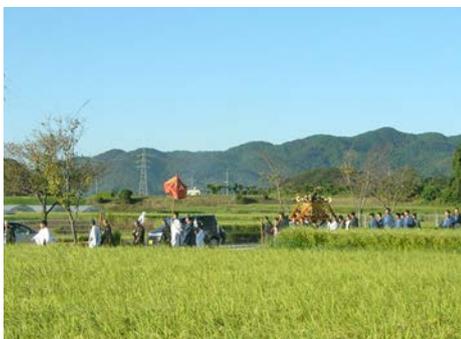


写真 稲穂垂れる田んぼの中をお下りは進む



写真 お仮殿着御祭の様子

○神事

正午から、お仮殿^{ほつぎよ}弍御祭が執り行われる。その頃、お上りに際する道清めとして、お下り同様に、8ヶ所に置かれた御幣へお清めの潮が掛けられていく。午後1時近くになると、再び奉納芸能演舞者ほか関係者を集める寄せ鉦が打ち鳴らされ、お仮殿に参集しお神酒をいただく。

午後1時から、荒穂の神様の前で奉納芸能が催行される。



写真 御神幸の道の両側に置かれる御幣

・災払

まずは、棒術で災いを祓いのける災払が行われる。鬼の姿をした子どもの災払から青年たちによる災払が行われ、「えい、や〜っ、えい」の勇壮な掛け声とともに催行する青年たちによる災払の迫力は、見物する人々を圧倒する力がみなぎっている。



写真 子どもらによる演舞



写真 青年らによる演舞

・鉦風流

続いて、鉦風流が登場する。この御神幸祭の代名詞ともなる「どん、きゃん、きゃん」の音を響かせ、荒穂の神様が鎮座される祭壇の前に進み、太鼓と鉦の音で会場を覆いつくす。鉦は約10kg~15kgほどあり、頭の上に振り上げ鉦を叩く姿に、集まった人々から感嘆の声が発せられる。初秋の頃とはいえ、暑さが残る季節に汗だくになりながらの演舞に、見学者から惜しめない拍手が送られる。



写真 お仮殿前にて鉦を振り上げての演舞



・獅子舞

次に演じられるのが、獅子舞である。二人の子ども演じる獅子釣りの軍配に合わせ、赤獅子、黒獅子の二体の獅子が舞う。荒ぶる獅子を操る子ども獅子釣りの姿に、可愛さと勇敢さを重ね、終わるころには観客も一様に感動を覚える。獅子が舞うとき散らす七色の獅子紙は、持ち帰るとお守りになると言い伝えられ、皆、少しずつ持ち帰り一年のお守りとしている。



写真 獅子釣りによって操られる獅子



写真 獅子釣りによっておとなしくなった獅子

・大名行列

最後に立傘・台傘・白羽熊・挟箱・黒羽熊で舞う大名行列が登場する。相對して黒羽熊・挟み箱・白羽熊・立傘を投げ合い受け取る様に、「無事受け取って〜っ。」という観客の願いと、それを支える支え人の所作に、皆、緊張と安堵の連続を味わうことになる。



写真 黒羽熊を受け取った様子



写真 立傘を相方に投げ渡す様子



資料 昭和31年時の大名行列

これら4つの奉納芸能が終わると、荒穂の神様のお上りへと祭は移行する。お仮殿から神輿が再び担ぎ手によって出され、催行者皆が荒穂神社までの帰路につく。お仮殿前では、神輿台座が据えられ、参集した人々の神輿くぐりが盛大に行われる。その傍らでは、獅子舞の赤獅子、黒獅子が子どもたちの頭を口で覆う所作が繰り広げられている。この獅子たちの口の中に頭を入れると、子どもたちがすすく育つと云い伝えられており、両親に抱えられた子どもらが獅子の口の中に頭を入れる。中には、獅子の怖さから泣き叫ぶ子らもあり、何とも微笑ましい光景である。



写真 出立前の神輿くぐりの様子



写真 神輿出立を前待つ人々 昭和28年(1953)

○お上り

参集者の神輿くぐりが終わると、荒穂の神様のお上りが始まる。お仮殿がある鎮斎隈(鎮西隈)の丘陵をあとにし、朝下ってきた道を上っていく。その道々には、催行者の労をねぎらうかのように沿道の人々によるお接待場が各所に準備されている。自宅のガレージや駐車場、店先を利用して、お茶、お酒をはじめ肴も準備される。この光景からも、町の人々に愛され親しまれた祭であることが分かる。お接待の場を神輿が去ると、奏楽と呼ばれる人々により太鼓と笛によるお礼のお囃子演奏が必ず行われ、感謝の意を忘れることなくお上りが続いていく。

お接待で振舞われるお酒に酔いしれ、荒穂神社での最後の奉納舞に少なからず影響を残す演者が出るのも毎年の祭の風情として楽しませてくれる。

世俗界と神域を分かち大きいしめ縄が張られた潮(塩)井川に到達すると、左手の「みこしあつめ」に神輿を乗せて、神様にお休みいただく。その数分の間にも、神輿の担い手は側のお接待所でお酒をいただき、良い心持ちとなっている。



写真 お接待の様子



写真 みこしあつめに置かれた神輿

ようやく神輿が荒穂神社境内へ入る頃、社殿前では先導していた立傘・台傘や挟箱、羽熊の奉納芸能の演者たちによる演舞が行われている。その間、荒穂の神が座する神輿は、昭和2年(1927)建立の鳥居傍に鎮座し、演舞が終了するのを待つ。その神輿の姿は、かつて社があった基肆城跡にあるタマタマ石を見上げているかのようである。



写真 荒穂神社にお帰りになった神輿



午後4時頃、荒穂の神様が神殿に到着し、神殿還御祭^{かんぎよ}が行われる。朝日を浴びつつ出立した御神幸祭も、夕日が基山を照らす頃、最後の舞台へと移っていく。

神殿へ荒穂の神様が戻られた後、神殿前の催行の広場では、大名行列のみが順を違えて先に奉納される。

神輿の担ぎ手他の人々は、神殿還御の神事が終わると役目を終え、再び神殿横の祭器庫にて衣装を着替え、神殿前で催行される奉納芸能を、祭の無事と一日の疲れが入り混じった眼差しで見つめる者、帰る者様々である。

その後、大祭最後の奉納芸能が催行される前に、参籠殿(接待所)から氏子役員、宮司たちによる餅まきが行われる。皆、「こっち〜っ」「届かんぞ〜っ」の掛け声とともに、餅を手に入れた歓声で沸き立つ。

この餅まきが終わると、神殿前で大祭最後の芸能の奉納が始まる。災払い、鉦風流、獅子舞の順で奉納され、獅子組の演舞が終わる午後7時頃幕を閉じる。

最後に執り行われる獅子組の舞が終わる頃、氏子総代の顔に今年も無事催行できたことへの感謝と安堵の気持ちが伺える。



写真 参籠殿（接待所）からの餅まき



写真 境内での芸能奉納状況（災払）



写真 境内での芸能奉納状況（鉦風流）



写真 奉納芸能を見つめる総代

獅子組が御神幸祭の締めとして、参宮している人々とともに、「祝おうて、三度」を唱和する。組頭の掛け声とともに、「いおうて、三度」の掛け声と手拍子三回を三度繰り返す締め行事で、参宮した人々の息の合った唱和に、全ての催行の無事への感謝と、支えてくださった多くの人々への感謝の気持ちが表現されている。唱和が終わると、参宮した人々の口々に、「お疲れ様」「また来年会いましょう。」の言葉が交わされる。

この「祝おうて、三度」の大合唱とともに、大祭は幕を下ろす。

「いおうて(祝って)、三度」 シャンシャンシャン

「いおうて(祝って)、三度」 シャンシャンシャン

「いおうて(祝って)、三度」 シャンシャンシャン 万歳!



写真 「祝おうて、三度」唱和の様子



写真 互いの労をねぎらう

【しめ縄おろし】

祭が催行された次の日、宮総代の人々によって大しめ縄の取り外しが行われる。

【感謝の宴】

大祭催行にあたって、神域に入ることを許されないにも関わらず、神事を下支えしてくれた女性たちへの感謝の宴が、大祭から二週間経た吉日に執り行われる。氏子役員の「この日は、女性が主役」という言葉から、男性たちの感謝の気持ちが表現されている。

これをもって荒穂神社の秋の大祭の全行程が終了となる。

(3) おわりに

荒穂神社の秋の大祭である御神幸祭は、基山に社発祥の地を有する荒穂の神の御神幸であり、本町を代表する秋の大祭の一つである。

初秋から始まる鉦風流や獅子組、お囃子の練習の音色が町を包む頃、町民が次第に祭の気配を感じ始める。大祭一週間前に氏子総出で行われるしめ縄打ちとしめ縄掛けで町中に祭の姿が現れる。これと併せて執り行われる神の座は、座元を担える3区・4区・8区・9区の役員宅の一つを座元とし、荒穂の神が御神幸される。その年の座元の家の前には、しめ縄打ちで縛われたしめ縄が掛けられ、祭の催行空間が一気に広がりみせ、御神幸祭の本祭へと町内が染まっていく。

本祭当日の早朝から繰り広げられる御神幸と奉納芸能の数々、それまで培ってきた催行者の技、再び出逢える沿道の人々の笑顔、そして近世から近代に寄進された石造物、建造物を舞台装置として、半年かけて育ててきた稲穂が色づく田んぼの中を、荒穂の神が恭しく御神幸される様子は、本町の秋を代表する歴史的風致を創りあげている。

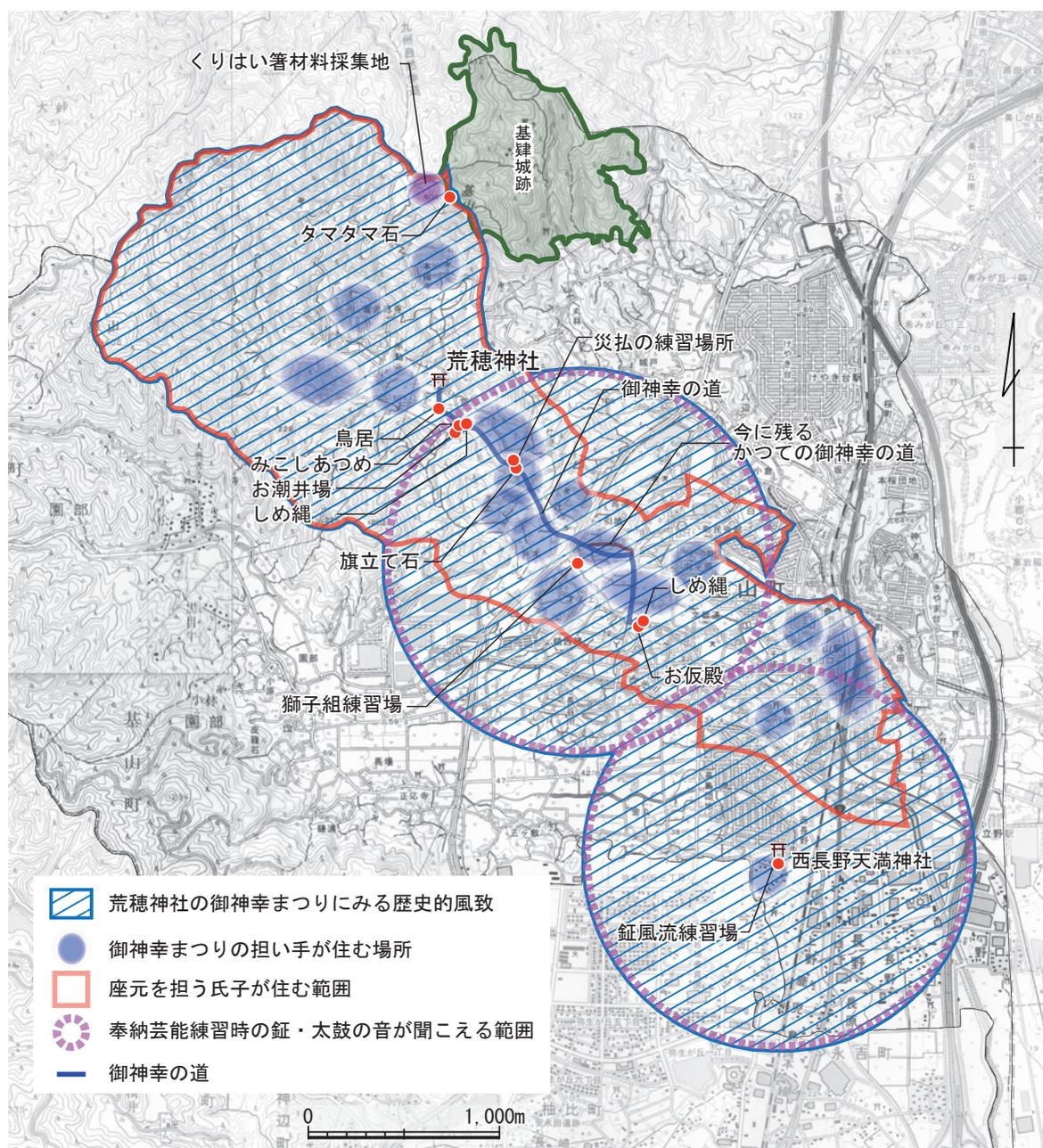


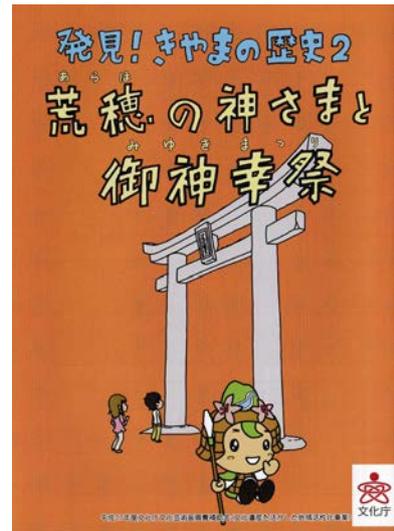
図 荒穂神社の御神幸祭にみる歴史的風致

【コラム】荒穂の神様のものがたり

社の御神幸祭を催行する人々が選ばれた意味が、昔話として伝えられている。

「むかしむかしのある年の出来事。いつものように瓊瓊杵尊さまが自ら田を耕し、田植えの準備をしておった。田に馬を入れて鋤かきをしておったが、日々の疲れか瓊瓊杵尊さまは畦に腰かけたかと思うと眠りこけてしまった。馬が瓊瓊杵尊さまを起こしたが、一向に起きる気配がなかったため、馬は退屈になり野山を駆け巡り、七日七夜が過ぎた頃、大木川（現鳥栖市）までたどり着いた時、大雨で渡ることができなかった。と、その時、馬は瓊瓊杵尊さまのことを思い出し、一目散に帰った。幸い、瓊瓊杵尊さまはお休み中で、馬はほっと胸をなでおろした。」

この時、馬が駆け巡った所に住む人々が、御神幸祭催行者だと伝えられている。



資料 荒穂の神様の物語を伝える漫画